

卷頭言——書くことと削ること——

昨年（二〇〇四年）の七月、大英図書館とロンドン大学SOASの共催で、木簡研究のワークショップが開かれた。中国語での名称を「英國國家図書館所蔵未発表簡牘研討会」といい、日程は二日間、参加者一二名という小さな会合であった。その前年に同図書館から、スタイン・コレクションの未発表簡牘をCD-ROMに収録したので、欲しい研究者には無料で配布する、との連絡があった。ただし受け取った者は、いずれ開かれる研討会に出席し報告すること、という条件付きである。私は欲しいと答えてCDをもらい、当然の約束としてワークショップに参加した。

「未発表簡牘」とは何とも魅力的な響きであるが、CDに収められた画像の大半は中国古典に言う「杣」すなわち削屑である。内容が『蒼頡篇』の断片であることも、一瞥してすぐに見当がついた。これに先立つ数年前に、大英図書館の保存庫に入室を許されたことがあり、いわゆる「未発表簡牘」の大半が削屑（debrisというラベルが付いていた）であることは、つとに承知のところであった。とはいえ、『蒼頡篇』自体について報告するのは難しい。この失われた字書をめぐっては、すでに文字学者による周到な研究があり、歴史畳の人間が嘴を容れる余地はない。とすれば一体、何を報告すべきだろうか。吹けば飛ぶような木簡の屑を眺めつつ、なかなかよい知恵が浮かばなかつた。

しかし、画像を睨んでいるうちに、いくつかのことに気が付いた。第一に、それが通常の文書や簿籍と異なり、篆書の面影を残した古体の隸書で書かれていること。第二に、觚と呼ばれる多角柱形の木簡から削り取られたと思われること。そして第三に、削屑の形状が特定の文字を訂正するためよりも、書写面の刷新を目的とするかに見えること。この三つの現象から読み取れるのは、次のような事実なのではあるまいか。すなわち、『蒼頡篇』を觚に繰り返し書いては削ることにより、漢

人は古式の文字の習得に努めた、というものである。『説文解字』巾部・幡字の説解に「幡は書兒の觚を拭う布なり」と見えているのは、漢代に觚が学習用の石盤のような役割を果たしていたことを教えてくれる。多角柱の書写材料が好まれたのは、一行単位で削除するのが容易であること、繰り返し削っても簡が損傷しにくいこと、「蒼頡篇」の一章六〇文字が一本の觚にちょうど収まること、などの理由によるのであろう。実際、敦煌馬圈湾遺址からは、「蒼頡篇」六〇字の書かれた四角柱の觚が出土している。むろん古体の隸書であれば、内容は「蒼頡篇」でなくとも構わない。甘肃省玉門市花海の烽燧址から出土した七角柱の觚は、詔勅と書信とが古体の隸書で記された珍しい資料であるが、書き誤りや訂正の痕跡からみて文字の練習に用いられたと判断される。正史に「史書」と見えているのは、このような古い隸書のことであり、その素養の有無が官吏としての評価に対し何らかの影響を与えたに違いない。とするならば、大量の杣の存在は、下級官吏の努力の跡を示す物証と言えることができる。——ワークショップでは以上のような報告ののち、李善上表の書かれた削屑や「論語」を記した觚形木簡など、日本における出土例をも紹介し、漢籍を記した木簡が文字の練習用であった可能性について私見を述べた。そこでは文字を「書くこと」と「削ること」とが同等の意味をもつていて。

簡牘も考古遺物である以上、たといいカンナ屑一片であれ、人間活動の痕跡としての側面をもつはずである。削屑が出土するのは、言うまでもなく簡牘を削った結果であるが、書くという行為の意味と同じく、削るという行為の意味も決して一様ではないだろう。とりたてて斬新な発見とは言えないけれども、このような認識を新たにすることは、画像CDのお蔭であつた。釈文だけを睨んでいたら、何の収穫もなかつたであろう。いかなる地域の簡牘であれ、「物に即した精密な考察」を常に心がけること。木簡学会が掲げる研究姿勢は、中国大陸から洪水のごとくに出土する大量の簡牘に対しても、その有効性を失うことはないだろう。